

特集

座談

ガイド、地域づくりを語る

インタープリター、インストラクター、
観光ガイド、案内人...

価値開発のパイオニア

学び、伝え、実践し、ビジネス化

県内でガイドが増えている。インタープリター、インストラクター等を含めた広義のガイドは40団体を超え、1,000人以上が活動を行っている。ガイドが案内する対象、地域、内容、方法は多種多様だが、地域の発展を願う気持ちが強い点で共通している。実践者である4人に地域づくりについて語り合ってもらった。

話し合った人々

源流の森インタープリテーション協会会長
ジャスティス・エンタープライズ(有)代表
NPO朝日町エコミュージアム協会事務局長
長井村塾事業部部長
(司会) 荘銀総合研究所副理事長

織田 洋典 氏
今野 正義 氏
松田 栄子 氏
原 弘三 氏
石川 敬義



織田 洋典

昭和6年、中津川村生まれ。南陽市宮内221-26。小学校卒業後、村役場林務係として勤務、その後木材会社で働く。平成10年の「源流の森インタープリテーション協会」発足で会長に就任。「1000年の森」づくり、子供たちと未来を語り合える環境づくりを目指す。

TEL 0238-47-3023

案内される立場に立つのと案内する側に立つのでは、同じものを見ても感じるものがまるで違う。案内する側に立つと地域の良さも課題もはっきり見えてくる。また、ガイドに説明してもらい見るとガイドなしで見るとでも、訪れた地域に対する印象がまるで違って来る。ガイドしてもらおうと感動や満足感が格段に高まる。そして、樹木や植物などの自然に対する接し方が欧米と日本で大きく異なる。日本では大人も子供も「名前は何？」と聞くが、欧米では自然と人や社会との関係性を聞く。発想がまるで違う。人と地域とをつなぎ、事象の意味を伝え、価値を開発する機能をもつガイドは、地域社会にとって大きな役割を担っているように思う。

織田 木とのかかわりが深い生い立ちだった



源流の森センターでカンジキづくりを指導するインタープリター

たので郷里の飯豊町中津川地区に第三の県民の森「源流の森」が設置されたのを機に、いろんな勉強をしようと思いいンタープリターになった。協会は県内各地から参加した百七十四人で構成しているが、素晴らしい勉強をさせてもらっている。また、白川ダムができる以前の中津川地区の人口は三千三百人だったが、その後五百人に減っており、ふるさとを活力ある地域にしたい気持ちもあつた。「森の学校」を開催し、自分が楽しく、訪れた人がもう一度訪れたいと思うような案内をしようと心掛けている。教えるインタープリターだと学校の先生と同じになるので、私たちは参加者と一緒に学ぶ気持ちで案内している。私が小さいころは自然が遊び場だったが、今

の子供は自然の中で遊ぶことを知らない。親子で参加する子供は親に対する依存心が強くて班編成している。さらに、荒廃している里山の活力を回復させようと植樹を続け、「千年の森づくり」に取り組んでいる。二年の今年には百二十数人の「芳志をいただき「草木塔」を源流の森センターに建立した。南陽市でも「えくぼの里案内人」として二十五人で烏帽子山の案内、菊まつりの案内をやっている。

観光でもガイドは重要な役割を果たす。名所旧跡の案内以外にも乗馬体験やアウトドアライフなど体験型ガイドが増えてきた。山形県の魅力を伝え、リピーターを増やしている。しかし、大半がボランティアで、ビジネスとして取り組んでいる例はまだ少ない。

今野 海外旅行の添乗をして、日本に帰ってくるのとホッとすると、栗子トンネルから山形入りすると感動する。自分のふるさとがいかに素晴らしいかを痛感する。欧米ではスキー、リバーラフティング、バードウォッチングなどプロのインストラクターが活躍しているが、山形でも自然をフィールドに何かできないかと思ひ、自分の名前をとって有限会社を設立し活動することにした。米国コロラド州との姉妹県州十周年企画としてその思いを実現したり、高齢になって山に入れなくなつた義父に代わって森のピオトープづくりを始めたり、小国町の山の中に残る敷石道をヒントに昔の峠道を調査したりした。調べてみると県内には埋もれたままになっている観光資源が数多くあり、それらを生かしてい

きたいと考え勉強している。日本自然保護協会が自然観察指導員等の育成を行っているが、ある専門家はガイドはアマチュアが持続性を持つとすればプロになる必要があり、それもある程度の年輪を重ねた経験が必要と言っている。昔は「山先達」「里先達」という言葉があり辞書にも残っている。今は「山先達」は登山やアルパインガイドなどとして残っているが、「里先達」はいない。私は「里先達」を「フィールドガイド」と呼んで復活させたいと考えており、グリーンツーリズムやインタープリテーションなどを含め「山先達」も兼ねて事業として成り立つようにしたい。事業を起こしてまだ一年半だが、事業化が成功するには三年はかかり、勇気と覚悟が必要と言われている。今は足腰を強くする基

今野 正義

昭和17年生まれ。山形市八日町2丁目4番38号。旅行プラン作成、旅行添乗歴10余年。日本レクリエーション協会会員、県観光ボランティアガイド・アドバイザー。西蔵王高原でのピオトープづくり、「山形・四季の学校」開催、自然環境や歴史遺産調査など活動は多彩。

TEL 023-623-6353



礎づくりの期間と思っており、いろいろ勉強している。

県内には自然や文化遺産が豊富に残っているが、それらの地域資源の価値がきちんと認識されているかとなると問題がある。資源の価値は時代や生活様式や産業構造の変化で変わる。現代的な価値観によって資源価値を見直さないと、保全本利活用もできず、貴重な地域資源を埋もれさせることになる。

松田「エコミュージアム」はエコロジ（生態学）の「エコ」と博物館の「ミュージアム」を結びつけたもので、フランスで生まれた考え方です。従来の博物館は施設で展示、研究することが中心だったが、エコミュージアムは自然、生活、産業の移り変わりを歴史的に明らかにし、その場所で展示

松田 栄子

昭和40年、朝日町生まれ。「朝日町エコミュージアム研究会」の平成元年の発足時からの会員。NPO法人の「朝日町エコミュージアム協会」スタッフとしてコアセンターに勤務。エコミュージアム・ガイド(まちの案内人)の会事務局長。

TEL 0237-67-2118内 線 521



保存、育成し地域の発展に役立てる考え方を。住民が自分の足元の資源を見直し、誇りを持つ地域にする活動でもあります。仕組

みは中枢施設としての「コア」と文化遺産、自然遺産、産業などの「サテライト」とそれらを結ぶ「デイスカバリー・トレイル」(発見の小道)とで構成される。ガイドは、遺産などの宝物のある場所へ連れていく「道先案内人」と、宝物そのものを説明する「サテライト案内人」とに分け、二十四人いる。二十三歳から七十八歳までと年齢層は幅広い。ガイド活動はボランティアでは長続きしないし、意識も高まらないので有償にしている。講習会を重ね研さんを積むようにしているが、案内活動をやっているうちに新しい宝物を発見したり、回数を重ねるごとに地域がよく見えるようになっていく。小学生は四年生で農業用水路を学ぶので学校と連携して「水と暮らしの探検隊」を企画し、親子で堰に沿って五^{キロ}を歩いた。その際、近くの寺で僧侶の袈裟は田圃を表しており、徳を積んだ僧侶ほど田圃の枚数が多い袈裟を着けるとい話を聞いて目からうろこが落ちた親もいた。町民みんなが学芸員となって、一人ひとりが主体的に地域とかかわるようになることを願っている。歴史を中心とする案内も大事だが、産業にも目を向けたいと地域は発展しない。朝日町がワインの産地でもあるのでワインと人とのかわりを多角的に調査研究し、ワイン産業にさまざまな付加価値をつけ奥深いワイン産地にしていきたい。ガイドは町民向けの活動を基本にしているが、六月から五月月間で三十回のガイド活動を行ったうち九割が町外の人への案内だった。日本初の本格的なエコ

ミュージアム活動ということで、沖縄県や三重県など県外からの視察者も多い。

先進的な試みを行う自治体には他県から視察者が訪れ、自治体職員は視察者への対応に追われる。しかし、住民税を納めている市民へのサービスを放り出し、納めていない人に無料で資料を配ったりするのはヘンだ。欧米では視察は有料になっている。行政は民間でできることは民間にアウトソーシングすべきだ。そこにコミュニティビジネスという発想が生まれる。

原 行政の持つバックグラウンドの大きさ、信頼性、影響力と民間の持つ活力、スピード、アイデアの相乗効果が表れやすい三位一体型まちづくりを行うべきと考えている。また、行政と民間と住民とがバラバラではまち

原 弘三

昭和42年、岡山県生まれ。山形大学農学部を卒業後、山形大学大学院で栽培植物起源学を専攻。㈱自然屋長へて店舗や栽培プラントの開設運営に従事。まちの交流空間「長井村塾」(横山寛道塾長)の開設で現職に。レインボー農産物や工芸品の販売、市民向け会議室の開放などを行う。

TEL 0238-83-2760





豊かな自然も解説があれば感動は倍増

づくりができない。私たちは、まちづくりに取り組みたい人に場所と機会を提供しようと「まちの交流空間・長井村塾」を開設した。長井市で行政と市民とが一体になって取り組んでいる「台所と農業をつなぐながい計画」(レインボープラン)とも深く連携することになった。レインボープランの取り組みは、県外から年間数千人の視察者が訪れる。市職員が対応しているが対応しきれず週二日間だけを視察者受け入れ日として制限している。そこで、視察者対応を市民もやろうと考え、市民ガイドを募集し、六、七人が週一回のペースで研修を行ってきた。本格稼働は来年春以降に行うことになるが、試験的に市民ガイドのデビューの機会を持つと、十月末に長野県飯田市からの視察者への説明を行った。視察者は理解の早い人、遅い人、関心の分野が人によって異なったりといるいるるので、ノート型パソコンとデスクトップ型パソコン

とを使いデータを準備し、視察者の状況に応じて説明の構成を自在に変えられるようにしている。「長井村塾」の経費は活動資金で賄う形態なので、レインボープランの案内業務はいずれ有料化し自立して活動を継続できるようにしたい。そのためにはNPO法人になることも一つの方法と考えている。

ガイドは地域社会を新たなレベルへ導いていくパイオニアであることを実感した。それでは、現在の課題と今後の展望を。

織田 インタープリテーションの案内活動は公的資金助成が一日につき二千元とガソリン代が出る。協会は案内以外の地域活動も行っており、二千元の年会費と日本財団からの六十万円の助成金を充てている。三角点の調査、草木塔の学習、氷場の研究など県内各地に出掛けて行って研修を行っている。会員は大半がサラリーマンであり、ガイド要請があっても出掛けていくには制約がある。協会としては若い会員がやりたい事業をやっていきくとにしている。

今野 行政マンにはうちの地域には観光資源がないと嘆く人が多いが、地域社会を角度を変えて見詰め直してみると素晴らしい観光資源があることに気づく。民間にはさまざまな分野の専門家がおり、そういう人たちが生かしていく姿勢が重要だ。また、行政は「前例がないと支援しにくい」

と言うが、ボランティアのネットワークづくりを支援するだけでも効果がある。私は行政の苦手な分野で民間がやれる分野を創意工夫してやっていきたい。

松田 行政は文化財に指定していても茅葺き家の保全など個人の所有物には支援しにくい。エコミュージアム活動として行政マンが年数回の茅束ね作業には参加できるはずだ。「うちの町には何も無い」と嘆く人には「町中が宝だらけ」と言い、「地域づくりする人がいない」と嘆く人には「あなたがやればいい」と言うことにしている。エコミュージアム協会は行政マンが三分の一を占めるが、その人たちが活動するときは行政マンとしてはなく一町民としてやっている。

原 自分が知っている自分と、自分は知らないが他人が知っている自分とがあるように、資源には市民が気づいているものと気づいていないものがある。山形県民はアンケートで「自然がいっぱいある」と答える人が多いが、「自然を生かす行動をしない」人もいるのではないか。山形の自然には、大都会の人々が強く反応する。どこの地域社会にも無関心層と拒否層とがいるが、遠くの関心層を取り込み地域を活性化する方法もある。私たちは市民ガイドだけでなく、レインボープラン推進協議会がこれから出版する本の出版も行いたいし、コンポストを使った市民農園設置などコミュニケーションビジネスの可能性もある。

みなさんの話を聞いていただけで元気が出てくる。地域づくり活動に参加するもう一つの人生、つまり「プラス・ワン・ライフ」運動を提案したい気がする。